V
付録

一　「支那通」について

はじめに

一九二一年（大正一〇年、以下、特別な場合以外は西暦を使用）の三月下旬から七月まで、芥川龍之介は上海を振出しに、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津等を遍歴した。この中国旅行は芥川が帰国後、まず上海の部分が「上海游記」と題して、『大阪毎日新聞』の八月から九月まで連載された。

芥川はこの旅行に乗り気であったが、実は旅行に出発して大阪に着いた時に、もう病気になって日程を遅らせている。それで、玄界灘を渡ることにかなりの精力と神経を使っていた。彼は上海に上陸するやいなや、車屋に囲まれ度肝を抜かれる。とりわけ彼にショックであったのは、彼らの怒鳴りたてる彼にはわからない言葉であったようだ。結局芥川一行は人力車ではなく馬車に乗るが、それも転覆しそうに突っ走るので、馬車にしがみつくようにしてやって来たのが、「東亜洋行」というホテルであった。昔このホテルで金玉均が暗殺されたという。二十七年前の一八九四年のことである。[1] ホテルに到着すると、馭者は車賃が足らないと口角泡を飛ばしてまくし立てる。同行の者はそれにかまわずさっさとホテルに入ってしまう。芥川は気の毒に思いながらも思い切って皆の後に続いて入

って、振り返って見ると、馭者はもう何事も無かったように恬然としている。彼は、〃その位なら、あんなに騒がなければ好いのに。〃と、カルチャーショックを書き留めている。

その次の文章を引用しよう。

＊我我はすぐに薄暗い、その癖装飾はけばけばしい、妙な応接室へ案内された。成程これぢや金玉均でなくても、いつ何時どんな窓の外から、ピストルの丸位は食はされるかも知れない。そんな事を内内考へてゐると、其処へ勇ましい洋服着の主人が、スリツパアを鳴らしながら、気忙しさうにはいつて来た。何でも村田君の話によると、このホテルを私の宿にしたのは、大阪の社の澤村君の考案によつたものださうである。処がこの精悍な主人は、芥川龍之介には宿を貸しても、万一暗殺された所が、得にはならないとでも思つたものか、玄関の前の部屋の外には、生憎明き間はごわせんと云ふ。それからその部屋へ行つて見ると、ベツドだけは何故か二つもあるが、壁が煤けてゐて、窓掛が古びてゐて、椅子さへ満足なのは一つもなくて、要するに金玉均の幽霊でもなければ、安住出来る様な明き間ぢやない。そこで私はやむを得ず、澤村君の厚意は無になるが、外の三君とも相談の上、此処から余り遠くない万歳館へ移る事にした。(2)

このホテルの〃主人〃については、辻某という元気のいい男だと内山完造が別のところで書いている。(3)〃大阪の社〃とは、大阪毎日新聞社のこと。芥川の中国旅行はそもそもが、『大阪毎日新聞』の企画によるものだった。〃村田君〃とは、この時、大阪毎日新聞上海支局員で、芥川の中国旅行に付き添った村田孜郎のことだが、彼についてはまた後でもふれる。芥川はこうした刺激が重なったせいか、まもなく乾性肋膜炎になり、里見病院に入院した。

ほぼ三週間の入院であった。

さて、引用文中、二度出てくる〝澤村君〟とは、どんな人物か。芥川を中国旅行に引っ張り出し、旅行記を書かせようと企画した大阪毎日新聞社の一員であるのにはちがいないが。[4]

一　澤村幸夫

大阪毎日新聞社に問い合わせてみると、毎日新聞社は一九八二年十一月に新社屋に引っ越したので、古い資料は処分してしまったと言う。ただ、一枚の履歴書と澤村の死亡記事とをコピーして送付してくれた。経歴については、実は学習研究社の『魯迅全集』第一九巻に紹介がある。

＊〔一八八三～一九四二〕日本人。〔一八九六年、湖広総督張之洞に傭聘されて中国に渡る。毎日新聞資料によれば、一九一六年、大阪毎日新聞社に入社。支那課長、東亜通信部長をへて、一九二九年六月から一九三二年六月まで上海支局長。その後は東亜通信部顧問、東亜調査会専任理事などとなり、一九三七年退職。したがって〕一九二九年ころは毎日新聞の東亜部顧問〔という原文は不正確〕。〔一九二九、三〇年に書いたいくつかの文章で魯迅を紹介するが、いずれも本名を誤って「周建人」としている。はじめは会えなかったが、のちに内山書店の「漫談会」などで雑談をかわした。「在りし日の魯迅」（『支那』一九三六年十二月号）参照。『江浙風物誌』（一九三九年）、『支那草木虫魚記』（一九四一年）などの著があり、後者には魯迅の挿話も散見する〕。[5]

これを読むと、またまたいろいろな興味を呼び起こす人物である。魯迅日記には、澤村幸夫の名前が四回出てくるが、もう一つ直接名前の出てこない出会いがあって、そのことについても『魯迅全集』第一八巻に既に触れられており、澤村の「周建人・宋子文」（『東洋』一九三〇年十一月号）という文章が引用されている。[6]

ただ、『魯迅全集』第一九巻の紹介文で〝一八九六年、湖広総督張之洞に傭聘されて中国に渡る〟というのは、澤村が十三か十四歳にしかならないからあまりにも早すぎるようだ。一八九六年（明治二九年）に湖広総督張之洞に傭聘されて中国に渡ったとする根拠は、澤村幸夫の『江浙風物誌』にある竹越與三郎の序文なので、それを引用しておこう。

＊澤村君は熊本の人であり、明治二十九年湖広総督張之洞に聘せられ其幕中に入り、湖北官報局参賛に任ぜられ、明治四十年漢口商務会参賛になつた。澤村君は当時猶ほ未だ一少年であつたが、其才幹気魄によつて黎元洪、梁鼎芬、辜鴻銘、楊守敬、王闓運等の大官巨儒の敬愛を受けたので、君に先だつ十数年、支那に在りし人々に対して閉ぢられた門戸は、君に対して開かれた。是れ支那に就いての君の見解が尋常に優る所以である。[7]

竹越の記憶違いがあるか、或いは文中の「二十九」という数字が「三十九」の誤植ではないか。そうだと都合がいい。

この『魯迅全集』第一九巻の澤村幸夫の紹介は大変簡要で、よくできている。そこで今は、澤村が死亡した時のことに一言触れておくだけにする。[8] 彼は、一九四二年（昭和一七年）四月二七日、享年六十歳で亡くなった。翌日の死亡記事の後半では、こう言う。

＊氏は熊本市の生れ、熊本市立商業卒業後渡支、大正五年本社に入社、外国通信部勤務　支那課長、上海支局長などを歴任、支那通として令名があった[9]

私が注目したのは、〝支那通として令名があった〟という評価である。彼のような人のことを「支那通」と言うのかということと、単に「支那通」としてだけでなく〝令名があった〟というのは、顕彰であったからだ。

二　「支那通」第一世代

澤村幸夫は、一九〇八年（明治四一年）ごろ宜昌峡一帯の地に十か月あまりを送った。それはどうやら、日本軍艦宇治や隅田などのため〝予め取調べておくべきことを、できるだけ丹念に取調べ〟るためであった[10]。これは、〝ある筋の内意を含んで〟したことであった[11]。〝ある筋の内意を含んで〟と澤村がいう〝内意〟は、今述べた軍艦の揚子江遡上のための調査であろう。澤村はこの調査で、胃腸を傷めたり、自分が乗っていた小舟が日清汽船に衝突されて河に投げ出され、あやうく死にそうになったりした。こうした時彼を励ましたのは〝英国人の気魄の雄大〟さと彼らの〝志操の堅実なこと〟であった[12]。

では、〝ある筋〟とは誰か。

＊ウツドコツク、ウツドラツクなどの特殊な型の英同胞艦が、宜昌峡のはげしい流れを、押され押されしながらも、大きな角のある蛇の化物でもあるやうに、波をきりわけて溯つて行く。その翌日には、湍の下にかく

れてゐる鋭い歯を有する巌礁を、あちらこちらに避けながらキンシヤが下つて来る。フアテルランドもやがて来るといふ。それを聞き、それを見ては、ああ英国人、日本人は口惜しいなと、私は純な青年の心もちから、今にして考へれば実に愚かな、安つぽい涙を流したものだつた。そして、その都度、そのころ沙市の領事代理だつた荒尾門下の片山敏彦氏へ、また上海に一機関を設けてゐた宗方小太郎氏へ、さらに大阪朝日の鳥居素川氏へ、返書を得る途もない旅行中の感慨を書きおくつた。(13)

この澤村の文章に出てくる三人の人物の一人が、〝ある筋〟であろう。私は、澤村をかわいがり一緒に荆州城外の龍山に登って、重陽登高の故事などを教えた片山敏彦が、領事代理という身分からして、この〝ある筋〟ではなかろうかと推測している。しかし、実のところ〝ある筋〟が誰かということはそんなに今は重要なことではない。ここで注意したいのは、澤村の先輩に当たるこういう人々も「支那通」と言われる人々であって、彼らはほとんど中国に関する情報を収集する活動に従事した者であったということである。

彼らは、所謂「支那浪人」或いは「大陸浪人」と言われる人々、ここに出てくる荒尾精（一八五九～一八九六）などに次ぐ世代の者である。付録として添付した「付表」を参照してほしい。宗方が（一八六四～一九二三）、片山が（一八六六～一九一〇）、鳥居は「支那通」には入らぬジャーナリストであろうが、彼が（一八六七～一九二八）で、この三人はほぼ同じ年代に生まれている。私はこういう人達を、「支那通」第一世代と呼びたい。

なお、「支那浪人」と「支那通」とどのような違いがあるのかという点については、まだ十分に考えていない。ほぼ同じ働きをした者だと思っているが、どちらかというと「支那浪人」の方が初期の人を呼ぶのにふさわしく、「志士」的性格を持つようだ。ただ、宮崎滔天（一八七一～一九二二）は割りと若く、これで割り切れない。彼など

は例外としてもいいであろう。ただし、「支那浪人」という言葉にも時代差があって、後になると、一攫千金を狙う山師を指す意味合いが濃くなる。

「支那浪人」にせよ、「支那通」第一世代にせよ、彼らの主な仕事は諜報活動すなわちスパイ活動であった。彼らが中国へ渡ったこととそういう仕事に従事したのには、二つの面が考えられる。一つは、彼ら自身の出身、例えば不平士族出身であったことである。彼らは、明治維新後の日本では発揮できなかった能力を、別天地で発揮しようとした。語学能力と別世界に伍して生き抜く才覚とを発揮しようとした。その能力と才覚を、お役に立てる機会はすぐやってきた。つまり日清、日露の戦争である。「支那通」が意義をもった最初は、戦争に役立つ情報の収集であった。こうして、彼らの多くは新しい日本という国家と結びつき、国家主義思想を持つようになったといえる。それで、黒龍会や玄洋社とつながりを持つ者が多く出たのである。また、大アジア主義の思想から東亜同文会に入る者もいた。彼らのつながりは、主義主張によることが基本であったが、他の要素も強く、とりわけ出身地域によるつながりが強かった。ここにあげた宗方、片山、鳥居の三人が全て熊本出身であることも、単なる偶然ではないはずである。また別の面では、当時の中国の事情にも規定される。当時の中国清朝は、先に引用した竹越の序文をもう一度見て貰えばわかるように、外国人――ここでは日本人――に閉鎖的で門戸は閉じられていた。旅行も簡単には許可されなかったし、清の〝大官巨儒〟に会見することなど不可能なことであった。[14] また、大雑把に言って中国は、地域ごとに政治、経済、風俗などが大変異なっていて、そういう経済圏なり文化圏ごとに情報を収集する必要があった。こういう点で「支那通」が活躍できたといえる。

簡単に言ってしまえば、「支那通」というのがそもそもスパイである、と言うのが言い過ぎならば、スパイ的性格を多分に持つものであった。念のために言えば、私は良いとか悪いとか言っているのではない。情報というもの

がそういう二面性を持っているのであるから。第一世代としての「支那通」は、日清、日露の二度の戦争を通じて得意の中国語を活かして或る者は通訳となった。そればかりでなく、軍事情報を得るというスパイ活動にも活躍した。宗方小太郎などは、その功績により大本営が置かれていた広島で、明治天皇の拝謁を得たりしている。『肥後人名辞書』では、宗方小太郎を〝実に支那通の第一人者たり〟といっている。[15]

片山敏彦もこの方面で活躍し、将来を嘱望されたが、澤村と沙市で会った一年後に、酒を明治天皇の誕生日の十一月三日から六十数日間飲み続けて、一九一〇年の正月に心不全で亡くなってしまった。彼は上手いだけでなく、大変上品な中国語を使ったという。[16]

荒尾精については今更言うまでもないが、念のために触れておけば、彼は東亜同文書院の前身である日清貿易研究所を設立した。最初は一八九三年、漢口に楽善堂――岸田吟香が一八八〇年（明治一〇年）銀座に開いた――という売薬店を開業し、同志二十余名を集め、中国内地の調査をしたのであった。[17] 薬と「支那通」との関係は、例えば内山完造と参天堂の大学目薬とか、清水安三とメンソレータムというふうに興味を呼ぶ。中国を比較的自由に動きまわれたのである。

宗方小太郎も荒尾と協力して調査をしている。ただ彼は漢字紙『漢口』を発刊したし、上海に出てからは、荒尾とともに東亜同文会や東亜同文書院の設立に参画する一方、一九一四年には東方通信社を起こしている。[18] これも、「支那通」と通信員との関係を考えさせる。

鳥居素川は荒尾の日清貿易研究所第一特別生であった。彼は身体を壊したので大阪朝日に入社した。彼は寺内内閣のシベリヤ出兵や米騒動への対応に反対し、内閣打倒の論陣を張ったが、「白虹事件」――一九一八年、『大阪朝日』の一記事の言葉〝白虹日を貫けり〟が朝憲紊乱罪にあたると揚げ足をとられ、発行禁止に至らんとした事件

――により朝日新聞社が弾圧され、論説委員としての責任をとって辞職した。[19]

彼ら「支那通」第一世代共通の特色は、国益の観念が濃厚にあることである。そして、宗方、片山らも『東亜先覚志士記伝』に収められていることが象徴するように、彼らにも「志士」的性格があったと言える。

三　「支那通」第二世代

澤村幸夫は、身体を悪くしたせいもあって、ジャーナリズムに入った。

私は、澤村幸夫はある筋の内意を含んで、宜昌峡一帯を調査した時、息の長い、狭隘な一国の利益に止まらない「事業」をおこなっているイギリスやフランスに感激したことを指摘したことがある。[20] この指摘の一端は、注の(10)で引用した文章でも窺えよう。彼は、自分の体力と志向とを考慮して、直接「事業」をおこなう者を志すのではなく、「事業」をおこなう者のために知識を与える者になろうと決意したに違いないと推測する。ここでいう「事業」とは、スケールの大きなプロジェクトを意味し、これによって広範な人々が長年にわたって利益をうけるとともに、実行する者にとっては、その生涯をかけるに値する仕事という意味である。

彼はまた、熊本の後輩として、またジャーナリストの後輩として鳥居素川の「白虹事件」に注目し、その結末を肝に銘じたに違いない。この事件以後、新聞が論説によって時流に逆らうなどということはできなくなったのである。時流と言ったのは、ひとり政府だけでなく、軍部が政策決定に徐々に力を増してくるからである。澤村には直接中国と格闘して業績をあげんとした個人的な意気も時代的な雰囲気もなくなったといえよう。

これが「支那通」第二世代だといえる。前の世代と違って、中国で業績をあげるのではなく、中国で業績をあげ

る者のための知識を提供しようとするのが、この世代の特色である。その知識は、勿論正確なものでなければならないが、その正確さの根拠は、科学的学問的というよりも、より実態に近いことというところに存在した。そのために、社会的風俗的に中国を捉えるようになったといえる。中国よりも中国人に関心が移ったと象徴的に言えるかもしれない。象徴的と言ったのは、全てがそうであったわけではないからで、橘樸（一八八一～一九四五）などがその例外の代表となろう。

とはいえ、中国の物産や風物への関心は相変わらずあったし、高まってもいた。芥川龍之介が一九二一年に中国旅行したことは既に触れたが、一九一八年末には谷崎潤一郎が、一九二〇年夏には佐藤春夫が――これは台湾と福建――中国旅行をしていた。また、上海を形容するにまたとない言葉「魔都」というキャッチフレーズを生んだ、村松梢風が一九二三年三月から五月下旬まで、彼としては初めて上海に滞在した。一九二五年四月には金子光晴が森三千代と上海に来ている。ここには、中国旅行ができるようになった日本側の、経済的社会的要因があるにちがいないが、今それに言及するだけの能力を私は持ち合わせていない。それはともかく、芥川の『支那游記』に池田桃川の『江南の名勝史蹟』が出てくる。

池田桃川（一八八九～一九三五）の『江南の名勝史蹟』という本は、芥川が旅行に出掛けた時に出たばかりであった。だから、芥川は旅行途中で送らせたか、日本に帰ってから読んだのであろう。この本は上海の案内のみにとどまらず、江南各地がコンパクトに纏められて、よく売れたようだ。[21] 池田桃川は熊本出身。読売新聞の上海特派員であったので、大阪毎日の企画にのっている芥川を案内するわけにはいかなかったであろう。

上海、杭州などは村田孜郎（?～一九四五）が芥川を案内した。村田は東亜同文書院の出身で中国語に堪能であった。大阪毎日の上海支局長をへて、東京日日の東亜課長、読売の東亜部長などを歴任して、戦後上海で客死した

という。金子光晴が森三千代と上海に一九二五年四月に来たとき、魯迅への紹介状を書いている。

蘇州、鎮江、揚州などは島津四十起が案内した。もっとも、芥川は島津とはあまりうまが合わなかったようだ。人格者と書いてはいるが、彼のことを俳人としてのみ紹介し、彼が驢馬から落ちたことや、喧嘩したことなども書いている。島津四十起編として『上海案内――附。蘇杭長江及南支案内』が上海金風社から一九一三年一月を初版として発行されている。第九版の序文（一九二一年二月）には、井上紅梅の「支那風俗研究」について触れ、この本の協力者の最初に井上の名前を記している。

「支那通」と言ったとき、私が先ず思い浮かべるのは井上紅梅である。それは、『支那風俗』上中下三巻を残し[22]、中国の風俗や習慣を紹介したからである。しかしそれにもまして、彼の記述が体験の確かさを感ずることから来ている。中国社会を理解するには、必要な手続きがあることを彼は知らしめたと言える。芥川も妓館に行き、芸者の旦那になるにはどういう手順がいるかという話をしかけて、〝後は井上紅梅氏著『支那風俗巻之上　花柳語彙』を参照するが好い。〟と書いている。紅梅は、本名を進といい、生没年は不詳。読売新聞通信員であった。一九四九年ごろ上海で没したと言われている。六十歳代半ばであったろうという。とすれば、一八八〇年ごろの生まれとなる。これに、内山完造（一八八五～一九五九）を加えて、井上、島津、村田、澤村、池田といったところが、「支那通」第二世代である。

第二世代に共通する特色は、既に述べたように、中国を風俗的に捉えるところにある。澤村幸夫は初期には、例えば一九二〇年五月三〇日『大阪毎日新聞』の「支那の『文学革命』運動――創始された口語文及び口語詩の現状」という文化方面のものを書いているが、一九二五年ごろから雑誌『支那』を中心に、中国の農民運動や国民党の動向などを書きはじめる。一九二九年上海支局長になったころからは上海のことが俄然多くなり、それらは、

『上海人物印象記』第一集、第二集、『上海風土記』などに纏められた。その後、東亜研究会の『東亜研究講座』から本を出し、『支那草木蟲魚記』は第五集まで出している。『江浙風物誌』や年中行事の本、『支那民間の神々』など著書だけで十八冊ほどにのぼる。[23] このように著作が多いのも、第二世代の特色といえる。

また、澤村のこういった本の書名だけからでも、関心が政治の動向や時流の人物といったことから、中国――と言っても彼の場合は江南地方が主であるが――を構成する風物とその風物を環境として暮らす人々の風習に向かっていったことがわかる。澤村の風物風習の紹介は、興味本位なものに堕さず、上述のように、中国で「事業」をするものの助けとなる知識を与えんとする発想からなされている。こういった発想に裏付けされ、該博な知識と豊富な体験によって書かれた著作があるので、澤村が〝支那通として令名があった〟と死亡記事に書かれ、顕彰されたのも当然といえよう。

このころの一般的傾向としては、池田桃川が『支那香艶叢書』として西施、王昭君、西太后などの宮廷秘話ものを書き、[24] 井上紅梅が『金瓶梅：支那の社会状態』上中下[25]や中国料理や麻雀についての本を書いたように、中国の社会状態を知識として伝えるだけでなく、やや興味本位に中国を扱うことが強くなっていく。彼らは、不可解で且つ享楽的な世界の紹介に限定するようになった。中国をあたかも、異質で別次元に生きる人々の世界にしてしまったといえよう。これは、「支那通」の質の問題である。外国の人々の生活を、現に正常に生活している部分を捨象して、非日常のことを取り上げて我々には不可解なものとし、興味本位に分断して紹介することは、大きな誤解を招く。真面目とは言えない。それは他者を対等の人間として見る目をねじ曲げる故、内外の人々に有益なものとはならない。これは「支那通」の陥りがちな弱点かもしれない。

以上は一般的傾向で、なかには内山完造のように、こういう「支那通」に反対し、中国人の生活の論理に合理性

があることを、すなわち、その土地の風土に合致した生活があって、中国人もそのように生活していることを日本に紹介した人もいたことはいた。

しかし、「支那通」の活路は狭められていった。勿論それは、「支那通」の質の問題ばかりではない。日本の中国侵略がこういう人達の活躍の場を狭めていったことに、より大きな問題があった。だが、そういうことに触れるには私はまだ勉強不足である。

おわりに

澤村幸夫は、一九四二年に死亡したが、それは、まだ自由な意見が言える、その最終的な時期であったのかもしれない。この次に活躍する時期を迎えた人々が、「支那通」第三世代といえよう。ただ、世代論は、とても魅力的で便利だが、単純に生年や年齢だけで割り切れないという欠点がある。むしろ、今言ったように、その人が活躍した時期で分けた方がピッタリくるはずである。にもかかわらず、生年で私が「支那通」を見てきたのは、やはり便利であることと、これが基本になるという考えがあったからである。

第三世代としては、清水安三（一八九一～一九八八）、彼などは第二世代にいれるべきかもしれないが、一八九一年生まれなので、今は第三世代に入れておく。そのほか、山上正義（一八九六～一九三八）、大内隆雄（一九〇七～八〇）など一八九〇年代以降に生まれた者が入るであろう。

こういう人々が活躍した時の中国の情況は、多くは戦火が目立ちはじめ、日本の侵略による奇形的な政治統治がおこなわれ出した時にあるので、中国は分断されざるを得なかった。だから、もう「支那通」という言葉のイメー

ジがそぐわなくなっている。それに、「満洲国」経営のために官僚や軍人それに猥雑な目的をもった者が流れ込み、「支那通」など不必要とする雰囲気になった。

それにもまして、彼ら自身の問題意識と態度とに共通点を見出すのが無理なようだ。彼らは、対象物としての中国を全体的に捉える精力と迫力を持たなくなったが、それは、持てと言うほうが無理な時代情況になったのである。彼らのなかには、左翼思想の挫折を経ている者がいたが、そうであればなおのこと、自分が生きていく上での思考の方が大切であった。その時、中国の現状を直視することは、必ずしも有益な方法でなかったにちがいない。この点、第二世代に相当しながら第二世代としては異質な橘樸（一八八一～一九四五）が、科学的学問的に中国を捉えようとする時期を持てたのと、第三世代は違うようだ。橘樸も結局挫折したように、次の第三世代は政治的にも思想的にもより厳しくなったと言えるのであろう。

清水安三はクリスチャンであったので一層強く感ずるのだが、彼は直接的に中国に接し格闘している。その際、たとえ彼に中国への〝報恩〟と〝贖罪〟の意識があっても、[26] 彼は中国よりも自己の事業である〝崇貞女子工読学校〟の進展の方に力点を置いたように感じる。これは、彼の格闘の対象が実は中国人ではなく、日本軍や在留日本人――大きく言えば、日本人だったからであろう。こうみてくるならば、「支那通」第三世代の共通項は、日本の中国侵略との格闘だったと言えるのかもしれない。

単純に割り切れば、敗戦前の中国研究は、中国侵略のためにあったと言えるのかもしれない。しかし、これまた結果から単純化して言えば、過去の中国研究は何一つとして中国侵略に役立っていなかったと言えるのではないか。過去の中国研究が役立っていたならば、つまり中国の風俗・習慣についての研究成果、或いは中国人の発想・生活についての研究成果を、日本のより広い人々が真面目にものにしていれば、――真面目という意味は既に述べた

――もう少しなんとかなったのではないか。少なくとも、軍部や政策決定層が真面目に取り入れていれば、中国侵略という形態はとっていなかったのではないかと思う。戦前も結局のところ、軍事面や経済面という実利的目的ばかりが優先して、そこに人が生活していることを忘れていた。或いは、人が生活していることを見ようとしなかったといえよう。「支那通」の残した良質の成果を活かすことができなかったといえるのかもしれない。

注

(1)　金玉均（一八五一～九四）。朝鮮開化派の人物。李鴻章と面談して東アジア三国の〝三和主義〟と朝鮮改革運動への理解を求めるために一八九四年上海に渡航したところ、刺客・洪鐘宇に暗殺された（平凡社『大百科事典』一九八四年より）。

(2)　『芥川龍之介全集』第七巻（東京岩波書店、一九三五年三月）八頁。
（引用にあたり、仮名遣いは原文のままとし、漢字は一部改めた。以下同じで、いちいち断らない）

(3)　内山完造『花甲録』（東京岩波書店、一九六〇年九月）七九頁。

(4)　吉田精一編集の『芥川龍之介全集』（東京筑摩書房、一九五八年）には、注がついていることに最近気がついた。第六巻の注によれば（六頁）、澤村幸夫についてはこうある。
＊澤村君　澤村幸夫。大阪毎日新聞社社員。
なお、芥川の『支那游記』などについては、いちいち記さなかったが、吉田精一の解説を参考にした。吉田によれば、芥川にとってこの中国旅行は義務的な面があって、それが芥川に必要以上の緊張を強いたという。
当の芥川がこの時は大阪毎日の社員であった。この時、澤村幸夫は外国通信部支那課にいた。学芸部長は薄田泣菫であった。
このホテルのこともそうであるが、澤村幸夫は親切に手配しているのに、うまくいかなかった。芥川の当時の手紙から、澤村が芥川に本や薬などを送り援助していたことがわかる。澤村はまた、芥川が人と会うに際し、日本人中国人どちらにも、前もって芥川の便宜のために相手側に手紙を出している。こういう親切は、芥川に却っておしつけがましいものになったかもしれないと私は

思う。芥川の澤村にあてた〝誨淫書〟についてのリストを読むと、その量の多さにやや異常なものを感ずる。芥川には、澤村の知識量と張り合う苛立ちがあったような気がするが、それはまた別の問題なので、今はこれ以上触れない。

(5)『魯迅全集』第一九巻（東京学習研究社、一九八六年八月）「日記注釈・索引」一三六頁。

(6)『魯迅全集』第一八巻（東京学習研究社、一九八五年十一月）「日記II」訳注(3)三三〇頁。

なお、澤村幸夫と魯迅との出会いについて、私も、「魯迅と合わなかった、ある〝支那通〟――澤村幸夫について」と題して書いたことがある。（『立命館国際研究　清水貞俊教授・竹内實教授退職記念号』六巻三号、一九九三年十二月）。（本書三七九頁以下を参照）

(7) 竹越與三郎「江浙風物誌に題す」昭和一三年十月（澤村幸夫『江浙風物誌』東京東亜研究会、一九三九年二月、所収）。

(8) 澤村幸夫の経歴について、私は、「ある〝支那通〟の軌跡――澤村幸夫について」と題して書いたことがある。（『関西大学　中国文学会紀要』第一五号、一九九四年三月）。

(9)『大阪毎日新聞』一九四二年四月二八日、第三面。

(10) 澤村幸夫「三十年を一世とする」（『支那』一九三九年一月号）。

(11) 澤村幸夫「『満蒙民族志』雑感」（『満蒙』一九三七年十月号）。

(12) 同(10)。

(13) 同(10)。

(14) 同(7)。

(15) 角田政治『肥後人名辞書』（熊本肥後地歴叢書刊行会、一九三六年九月）。

(16) 葛生能久『東亜先覚志士記伝』下巻（東京黒龍会出版部、一九三六年十月）。

(17) 同(16)。

(18) 同(16)。

(19)「白虹事件」及びその影響などについては、後藤孝夫『辛亥革命から満州事変へ――大阪朝日新聞と近代中国』（東京みすず書房、

一九八七年九月）を参考にした。

(20)　同(8)。

(21)　池田桃川『江南の名勝史蹟』（上海日本堂書店、一九二一年三月二〇日印刷、二五日発行）。

なお、この初版本には、著者の肩書に、「読売新聞上海特派員」とあり、「序」がついている。この序文は、〝山東に老いんとする玄耳〟という池田の熊本の先輩が書いたが、次のような箇所がある。

＊此度の著述――見本刷――蘇州より杭州に至る百卅余頁を見て、多大の期待を有つてゐただけに自分は失望を感じたといふことを直言する。氏の本領を発揮すべき適処でなかつたのである。一体案内書をおもしろく書かうといふのは無理な企てである、誰も失敗することを君もやはり失敗してゐる点があるのは致方無いが、上海といふ便宜な土地に居る君にしては今少し注意を払つたらばと惜まざるを得ざることが多い、此は多くの著述者に不満を感ずることで君も亦其を免れなかつたに過ぎないのである。其例を一々挙ぐるのは煩はしい、君能く注意せられたら再版以後に訂正せらるべき条は少くあるまいとおもふ。かういふ著述家の義務は親切といふことです、行届いた注意を以て改版毎に訂正して行くことです。

この序文のせいか、一九二八年十月に訂正改版が、一九三八年四月には三版が出ているが、「序」は削られている。また、肩書もなくなっている。

(22)　井上紅梅『支那風俗』上中下巻（上海日本堂書店、一九二〇～一九二二年）。

(23)　澤村幸夫の著作については、私は「澤村幸夫著作一覧」として、注(8)の、『関西大学　中国文学会紀要』に載せた。

(24)　池田桃川〔支那香艶叢書〕は全六巻、上海日本堂書店。分売せずと広告にはあるが、一部は単行本として既に発売されたものもある。

第1巻　支那宮廷秘録　　第2巻　西施

第3巻　支那性的小説　　第4巻　西太后前編

第5巻　西太后後編　　第6巻　王昭君

(25)　井上紅梅『金瓶梅：支那の社会状態』上中下巻（上海日本堂書店、一九二三～一九二四年）。

なお、これは、背表紙には『金瓶梅と支那の社会状態』と書いてあるが、表紙には『金瓶梅：支那の社会状態』とある。実は、紅梅の「金瓶梅と支那の社会状態」という序文に当たる文章が入れてあって、後は『金瓶梅』の訳本である。

(26) 清水安三『朝陽門外』（東京朝日新聞社、一九三九年四月）六一～六五頁など。

〔付表〕

＊試みに「支那通」の人物表を作ってみた。

1．勿論これだけの人物で終わるものではない。「支那通」である人物を、どしどし御教示願いたい。

2．☆印は、本文で何らかの形で触れた人物である。

3．岸田、鳥居は「支那通」とはいえないが、便宜上「表」にいれておいた。

「支那通」人物表

第一世代

☆岸田吟香（一八三三～一九〇五）

☆荒尾東方斎・精（一八五九～一八九六）

☆宗方小太郎（一八六四～一九二三）

☆片山浩然・敏彦（一八六六～一九一〇）

☆鳥居素川・赫雄（一八六七～一九二八）

☆宮崎滔天・虎雄〔寅雄〕（一八七一～一九二二）

・大谷光瑞（一八七六～一九四八）
・藤原鎌兄（一八七八～一九五三）

第二世代

☆井上紅梅・進（一八八〇?～一九四九?）
・後藤朝太郎（一八八一～一九四五）
☆橘朴庵（江南）・樸（一八八一～一九四五）
☆島津四十起・長次郎（?～?）
☆村田烏江・孜郎（?～一九四五）
☆澤村幸夫（一八八三～一九四二）
☆内山完造（一八八五～一九五九）
☆池田桃川・信雄（一八八九～一九三五）
・中江丑吉（一八八九～一九四二）
・中野江漢・吉三郎（一八八九～一九五〇）

第三世代

☆清水安三（一八九一～一九八八）
・鈴江言一（一八九四～一九四五）
・丸山昆迷・幸一郎（一八九五～一九二四）
☆山上正義（一八九六～一九三八）
・奥野信太郎（一八九九～一九六八）

・村上知行（一八九九～一九七六）
☆大内隆雄〔山口慎一〕（一九〇七～八〇）

〔付記〕これは、一九九三年十二月四日、日本現代中国学会関西地区研究会での報告をもとに、若干手を入れたものである。当日、山口一郎先生より、「支那通」をスパイと断言するのはいかがなものかというご意見と、現在は「中国通」と中国側が言うことがある等の教示を受けた。記して謝意とさせて頂く。また、司会の山田敬三先生より、孫文の宗方小太郎宛の手紙の訳文を後日頂戴した。これも、記して謝意とさせて頂く。

二　魯迅と合わなかった、ある「支那通」

はじめに

魯迅（一八八一-一九三六）と合わなかった「支那通」と、うまが合った「支那通」がいることに、私は近頃、日本人の著作を読んでいるうちに気づいた。井上紅梅（一八八〇?—一九四九?）とか澤村幸夫（一八八三-一九四二）が合わなかった「支那通」であり、内山完造（一八八五-一九五九）が魯迅とうまが合った「支那通」である。

そもそも「支那通」などという者に、「支那人」が合わないのが普通であろう。それは、「日本人」である私が、「日本通」なる外国人などなるべく遠慮したいと思うのと同じであろう。

だから、「支那人」とうまが合った内山の方こそ考察に値するようだが、内山については論ずる人もあろう。だが、澤村幸夫となると、あまり知っている人がいなかった。魯迅、澤村、内山の三人はそれぞれ二つ違いの年齢で、一緒に顔を会わせたことがあり、食べ物もどうやら一緒に摘んだこともある仲である。そこで、澤村幸夫について述べてみることとした。

一

澤村幸夫の経歴については、未だ十分な調査を行なっていない。大阪の毎日新聞社の好意によって、彼の履歴書のコピーを頂いた。[1] 澤村幸夫は、明治一六年（一八八三年）九月二六日熊本市に生まれ、熊本市立商業を卒業している。[2]

澤村幸夫は、大正五年（一九一六年）二月五日、編集局見習員として大阪毎日新聞に採用された。外国通信部と政治部とを兼務し、月手当て五十円であった。四カ月ほど後の六月三〇日に、社員に登用されている。正式には、この日が入社日である。時に澤村三十三歳。

澤村幸夫はその後、大正一〇年（一九二一年）八月三一日に論説兼務を命ぜられ、翌年十二月一日に支那課長を命ぜられている。昭和三年（一九二八年）十月一五日東亜通信部長。昭和四年六月一日上海支局長を命ぜられ、部長待遇となる。その年の六月二一日に上海へ向けて出発し、昭和七年（一九三二年）六月一四日に帰社し、東亜通信部顧問を命ぜられた。

澤村幸夫の著作活動を調べてみて、私は、その多種多様な題材に驚嘆した。それは、次のように多方面にわたっており、殆どを東亜研究会の雑誌『支那』に発表し、そこから本にしている。

1農村問題、 2文学関係、 3在日中国人、 4人物探訪、 5上海の風土、 6草木虫魚、
7民間信仰、 8その他

今、「澤村幸夫著書目録一覧」を付録として添付しておくので、参照されたい。

ただ、新聞記者特に上海支局長などになりながら、他方で多くの（私は、多いと思うのだが）文章を他誌に書くことができ、本も出すことができたというのは、新聞社における位置というものが、たとえ東亜調査会に所属していたにしても、いかがなものであったろうかと、私は思う。[3]

ここで、澤村幸夫の独自性が現れている文章を見てみよう。それは、〔対支三十年を語る〕特集中の「三十年を一世とする」という文章である。[4] この文章は、先ず、対支三十年の最初には、韓国の李太王退位や伊藤博文の暗殺、また光緒帝、西太后の連続崩御など鬱陶しいことばかりがあり、またタフト米大統領の満州鉄道中立案などもあって、対米感情も良くなかったと述べる。次に、「英国人の気魄の雄大にして、その志操の堅実なこと」を揚子江を遡る英国艦と、四川開発に半生を捧げているリットル夫人について見る。澤村はこの時、日清汽船に衝突されて溺れ死にかけたが、中国の天主教徒に救われ、フランス宣教師の教化の偉大なることを感じたと言う。澤村は、この僅か千五百字程の文章で、イギリスとフランスの中国における「事業」が口先や目先だけのものでないことを、自分の体験から強調し、日本人もそうすべきだと言っているのである。〔対支三十年を語る〕特集中の他の人々の文章が、日本政府の対支外交政策への不満を述べている中で、自分の過去のことを書いて、英仏の「事業」の大きさと息の長さを伝えるのは、異質なものである。

この文章は澤村が定年の翌年五十六歳の時に書いたものなので、多分に自己弁明と正当化とが入っていると思うが、それにしても、彼のめざしたことが、中国の単なる現状理解や分析にあるのではなく、中国という地に生活している人々に益ある行為（＝「事業」）に寄与しようとするところにあったことがわかる。これが、澤村個人の生涯において貫徹されたかどうかを今は問わないが、彼としてはそういう願いをもってやって来たと主張しているような文章である。

澤村幸夫には、少なくとも時流に乗って中国を処理しようとする発想はなかった。

二

私は、澤村幸夫が中国の所謂「文学革命」を日本人にいち早く系統的に正確に紹介したことに注目していた。[5] ところが、『東洋』という雑誌の三三巻十一号（一九三〇年十一月）には、「周建人・宋子文」という澤村の文章があり、「周建人の魯迅氏」と書いてあった。[6] つまり、魯迅の本名を周建人としているのである。また、一九三一年九月発行の『上海人物印象記（第二集）』[7] にも、項目からして「周建人」とあり、魯迅の本名を堂々と間違えたまま上梓しているのである。

このことは、魯迅研究者にはつとに知られていたことかも知れない。試みに、学研から出た『魯迅全集』の第十九巻には、以下のような注釈がついていたのである。わかりやすくするため、先に北京人民文学出版社一九八一年版の『魯迅全集』の原文をあげておこう。その次が注釈である。

＊澤村幸夫　日本人。一九二九年前后為日本『毎日新聞』東亜部顧問。[8]

＊澤村幸夫〔一八八三-一九四二〕日本人。〔一八九六年、湖広総督張之洞に傭聘されて中国に渡る。毎日新聞資料によれば、一九一六年、大阪毎日新聞社に入社。支那課長、東亜通信部長をへて、一九二九年六月から一九三二年六月まで上海支局長。その後は東亜通信部顧問、東亜調査会専任理事などとなり、一九三七年退職。したがって〕一九二九年ころは毎日新聞の東亜部顧問〔という原文は不正確〕。〔一九二九-三〇年に書いたい

くつかの文章で魯迅を紹介するが、いずれも本名を誤って「周建人」としている。はじめは会えなかったが、のちに内山書店の「漫談会」などで雑談をかわした。「在りし日の魯迅」（『支那』一九三六年十二月号）参照。『江浙風物誌（一九三九年）、『支那草木虫魚記（一九四一年）などの著があり、後者には魯迅の挿話も散見する[9]」。

澤村幸夫の魯迅についての文章は、上記以外にも、「魯迅君のしのび草[10]」や「魯迅を懐ふ[11]」などがある。さすがに、これらの文章では魯迅の本名を周樹人としているし、「実弟の周建人」と書いている。

澤村幸夫の「恐怖時代に終始した支那文壇の現状――恐らく三一年もこの連続」では、「周樹人の魯迅」となっているから、この辺から、間違いに気づいたのであろう。この文章は、『東京日日新聞』の昭和五年（一九三〇年）十二月二八日に掲載されている。

思えば私自身、これまでに随分間違いをしでかしてきた。間違いは普通無意識にしてしまうもので、無意識故に未だに気づかぬものもあるに違いない。また、同じ間違いと言っても、大したことと大したことでない場合があろう。魯迅の本名を間違えるのは、私からすれば、「大したこと」のように思われる。魯迅とは、一体誰であるか、魯迅の本名は何か。このことが中国においても詮索されたことがある。日本人に魯迅という名前が誰それのペンネームであると知らせることは、それだけで大きなスクープであったと思う。しかし、「狂人日記」が発表されたばかりの一九一〇年代末ならばともかく、一九三〇年にもなって、いくら外国人だからといって、魯迅の本名を間違えるのは、しかも、報告として雑誌に載せた文章だけでなく、本にする時も気づかずにいるのは、相当なそこつ者で恥ずかしいことであるに違いない。

しかし、私が言うのはそういう意味だけではない。一つは後述するように、澤村幸夫は、魯迅ととても親密であったことを誇っているからである。二つには、昭和四年（一九二九年）植田捷雄と共編で『支那人士録』を出版し、次のように記述しているからである。（なお引用文中の／の印は、改行を表す。以下同じで、いちいち繰り返さない。）

＊周樹人　字魯迅　浙江紹興人　仙台中学　千葉医学専門学校／北京大学、師範大学教授、支那小説史に精しく日本小説の翻訳及び創作多し、四十七歳

＊周作人　字仲密　浙江紹興人　江南水師学堂　日本法政大学　立教大学／北京大学、燕京大学教授、日本文学に精通、新しき創作家、思想家、著作多し、四十四歳

＊周建人　浙江紹興人／評論家、奴隷性、群衆性、婦人問題等の論文あり、周作人、周樹人と共に三人兄弟、三十七歳[12]

この意外に正確な記述は、そして細かい箇所では間違いもあるが、東亜同文書院の教師であった植田捷雄の手になるものであろうが、澤村はこの本に、昭和四年一月に「序」を書いているのであるから、周樹人と周建人との違いはわかっていたと見られても当然であろう。共編者として記述に責任を負わねばなるまい。

私は澤村がそこつ者であるかどうかに興味があるわけではない。本来ならば、恥ずかしいことをした後の彼の態度を見て、一九三〇年代の特色が窺えたならば、それをこそ考察してみたいと思ったのである。残念ながら、私の能力不足からか、あるいは勉強不足からか、そこまでに至らなかった。

ただ、自分の身に引きつけて考えた場合、間違えていたことに気づいた後、澤村はどうしただろうかということ

に関心を持った。一般的に言って、ことが「大したこと」であればあるほど、間違いというものは訂正できぬもののようだ。人は誰しも間違えるのだが、間違えたということ自体は結局訂正が出来ないもので、後の人から、その間違いの数やら質によって、その人の格とでもいうものを判定されるものなのかも知れない。訂正という行為があったとしても、それは本人の何処か外れた所でする自己満足にすぎず、訂正など出来ぬところで人は勝負させられているのであろう。そういう厳しさを持っているかどうか。そういう厳しさを持つように努力しているかどうか。澤村幸夫の間違いは、そんなことを私に問い返しているような気がした。

三

澤村幸夫は魯迅との出会いについて、次のように言う。（引用文の仮名遣いは原文のままとし、漢字についてはなるべく常用漢字に改めた。以下同じで、いちいち断らない）

＊私が初めて彼の家をおとなふたのは、昭和四年の夏であった。（略）門は常に固く閉されてゐて、実弟の周建人か、内山書店の内山完造君かの外はめったに開かれる事はないと、前以てきかされてはゐたが、敬意を表するための名刺だけでも届けておきたいと、新刊の『今日の日本（ツーデーオブジャパン）』の外に二、三種の書と仕舞用のきれいな舞扇とを手土産として、黒い大門を叩いた。果して留守、その後、どうした機会で近しくなったかは、はっきりした記憶がない。多分、内山書店あたりで偶然出会ったのが契機となってのであらう（ママ）。その年と五年、六年の三年を通じて、一・二八の上海事変が起る時まで、二日をあけず、時としては毎日毎日、多くは内山書店の

客が立ちこむ店の一隅に座を占めて、よく飽きもせずに、二人は雑談に耽る例であった。[13]

もう一つ引用しよう。

＊一九三一年の上海事変が起る少し前のある日、魯迅と私とが話しこんでゐると、内山の主人が紙の包みをさらさらと披いて、大阪あたりでよく用ひるかき餅の色よりは蓮すッ（ママ）ひらたい何かを食へとすすめた。何気なくその一片をつまみ上げると龍蝨だ。一度つまんでは見たものの、一寸、口にもって行く気になれず、そッと元の位置にかへすと、これを見た主人は、支那通の澤村君ともあらうものがと、声高に打興じて、うまいですよと、自身はさらに一片をばりばりと食った。魯迅はと見ると、竹のパイプに両切をさしこんだのを、知らぬ顔で吹かしてゐた。けだし、皮肉屋で、物識りの先生も、かすてら、せんべいに手を出すやうに手を出しかねたのである。[14]

こういう文章からは、澤村と魯迅とが単なる知り合い以上の間柄にあったように、私には読める。時には、魯迅、澤村、内山と三人打ちそろって「お菓子」を摘みながら雑談をしており、和やかな心豊かなものを感じるくらいである。因みに、「龍蝨」とは「ゲンゴロウ」の一種のことである。

では、魯迅の方ではどうであったか。魯迅日記には、澤村幸夫の名が四回出てくる。

＊一九二九年　九月二八日　晴。澤村幸夫来、未見。

＊　同　年　十月　九日　晴。上午寄淑卿信。澤村幸夫来、未見。
＊　同　年十一月　三日　星期　晴。上午澤村幸夫贈《毎日年鑑》一部。
＊一九三一年　二月　五日　雨。澤村幸夫君贈《Japan, Today and Tomorrow》一本。

以上の四項だが、さすがに最後のものには「君」が付いているものの、私には甚だ素っ気ないものに見えた。九月二八日はもう秋であって夏ではない。澤村が上海に着いたのは六月末頃のことであろうから、この日以前に魯迅に会っていたのかも知れないが、それは書いていない。前日の二七日に、海嬰が生まれているから、二八日も魯迅は何かと忙しくしていたのだろう。或いは澤村の記憶による日時はあまり信用出来ないから、この日が澤村が初めて魯迅宅を訪問した本当の日なのかも知れない。

十月九日も「未見」であるが、なぜ「未見」をわざわざ記しておいたのか、わからない。

一九三〇年には一度も澤村の名が出て来ない。

最後の本の名前は、澤村言うところの『今日の日本』であろうが、毎日新聞社から出している英字グラフの名前の違いも、何かピタッとこない。(15)

それにしても、魯迅日記には、会わなかったことと本を貰ったことしか記入されていないのである。魯迅がその日会った人の名前をすべて日記に記していたわけでないことは当たり前のことだ。また、本のことは必ずと言っていいほど記している。とすれば、澤村幸夫から直接本を贈られたのだろうが、話したということだけがわかる記述は、一つもないと言えよう。澤村自身が「二日をあけず、時としては毎日毎日」、「よく飽きもせずに」と言うにしては、この落差は甚だしいような気がする。

魯迅日記にあって、澤村幸夫の名前が出てこないもう一つの項目がある。

＊一九三〇年八月六日（略）晩内山邀往漫談会、在功徳林照相並晩餐、共十八人。

学研の『魯迅全集』第十八巻の三三〇頁訳注（3）「漫談会」に、澤村幸夫が『東洋』三三巻十一号に書いた文章が引用されている。その一部をここに引けば、

＊私の魯迅氏と親しく語ったのは、欧陽予倩氏が久しぶりで広東から上海に出て来たのを迎へて、八月六日の夜、精進料理の功徳林に小宴を催した時だった。（略）ふいと気がつくと、当年四十九歳の魯迅先生は真面目くさった顔をして、ぽこ、ぽこ、ぽこと木魚を叩いてござった。（略）私が、かの書を増補訂正を加へて大小説史たらしむる意はないかと問ふと、今までは一処に定住して、一事業に専念する暇がなかった。まだ私は二十四史さへ買ってゐない、と微苦笑してたのは、いかにも魯迅らしかった。[16]

この日撮った写真は、『支那』二七巻十二号の澤村幸夫「在りし日の魯迅」に、一部（澤村と魯迅が写っている前列七人）が載っているし、勿論この学研の『魯迅全集』十八巻の口絵にも載っている。[17]

魯迅の日記には、当日参加した欧陽予倩のことも郁達夫、田漢なども、誰一人として触れていない。

先の「龍蝨」を食う場面では魯迅も内山も大変愉快そうに、互いの胸襟を開いて話をしているかのようであるが、あくまでもそれは、澤村幸夫から見た魯迅であり、内山である。また、功徳林の小宴についても、その宴会が終わ

った後の、木魚を叩く魯迅の姿に当時の状況を重ね合わせて、魯迅、郁達夫、田漢などの厄介な関係について考えることが出来るかも知れない。[18]

私は、この出会いは「左連」結成後の、結構難しい顔合わせだったのではないかと想像する。そして、何の根拠もなく言うのだが、魯迅たちは「漫談会」を、よい意味で、利用したのではないかと思う。だからこそ、魯迅は十八名の名前に触れていないのであろう。だから、魯迅が澤村幸夫に触れていなくても、とりわけ澤村に冷淡であったと言うわけでもなかろう。とすれば、澤村のボルテージが少々上がっているということになろうか。先の澤村の魯迅と親しく話したという文章は、彼の関心の輪と魯迅のそれとが微妙にずれていることを巧まずして示した文章であろう。もっとも、澤村もそういう党派的な確執に関しては、無頓着ではなかった筈だが、[19]今そういう政治的なことには触れないでおく。ただ、澤村の方から押しつけがましく親しく語り、魯迅の方が微苦笑しているのは、何か魯迅が辟易しているように感じられる。「まだ私は二十四史さへ買ってゐない」と苦笑いをして言った魯迅を、「いかにも魯迅らしかった」と書いた澤村の「いかにも」とは、どんなことであったのだろう。実に安直に理解したような書き方に、私には思えた。

澤村の他の文章を読めばすぐわかることだが、彼は該博な知識を持っている。中国の古典、と言っても普通の経書ばかりではなく、個人の集やら詩話、地理書、筆記等々かなりの博覧家である。更に英米人の中国に関する本もよく知っている。ハウクス・ポット「上海史のスケッチ」「支那史概要」、ジェ・デイ・クラーク「上海および其付近のスケッチ」等々。だから、私の推測では、内山書店における「漫談会」でも、澤村は独自の位置を占めて居たのではないか。澤村自身の経歴と知識があれば、まさに支那の万端に通じていたと言ってもいいのではなかろうか。時には、魯迅をも凌駕する「支那通」であったのではないかと思う。

＊これ等の魚に関してばかりでなく、凡そ浙江のことで知りたいがわからぬことといへば、まづ魯迅氏に問ひ、それでもわからねば、父親に甘える児のやうに、同孚路の裏町の章炳麟翁を、極司非而路に蔡元培翁を訪ふのを例とした。[20]

この極めて真面目な澤村の文章も、案外魯迅側からみれば、なんでもかんでもうるさく聞く者の像が描かれている文と見られないこともないだろう。おまけに、もし知らないとなれば、どこかで聞いて来て――それが章炳麟であるか、蔡元培であるか澤村が言わぬにしろ――、後でこういうことだとわかったなどと聞かされるのは、只でさえ愉快なこととは思えない。まして魯迅の知らぬことがわかる者と言えば、名前を言わなくても、魯迅には推定出来よう。少なくとも、魯迅の現在の心境とは別の次元で、澤村は澤村の知的好奇心を追い求めているように思える。

＊彼はぽつりぽつり、ぷッ切ら棒で、語りたいことを語った。私は教はりたいことを教はり、問ひたいことを問ふた。ただ、私は章炳麟・胡適などとも、しばしば往来してゐることに関しては、秘せんとして秘したわけではなかったが、一度も彼の耳には入れなかった。彼は、その頃、蔡元培の蔭ながらの庇護の下に上海生活の安全を保ってゐるとの噂も聴いてゐたが、私は蔡元培との往来などに関しても、曾て彼に告げたことはなかった。虹口の日本人倶楽部でささやかな食袱料理の会を開くやうな場合も、蔡元培を主賓とする時には、彼に相客の選定をもとめ、胡適・魯迅のいづれかを中心とする時には、また、中心となる二人へ対して、予め好き諒解を遂げた上相客をえらぶことにした。

これは長年の支那人交際から学び得た私の経験の結果で、政治的に、思想的に、はた、郷党的に党派が多く

て、その党派感情は驚くほどに鋭くて勁い人々に交はるには、また、上海のやうにテロリスト横行の地では、さうすることが最も無事だと信じてゐたからである。[21]

澤村には何の悪意もないし、彼は正しいことをしているといっていい。今、私は当時の例えば「左連」をめぐる状況などには触れない。一般的に言っても、交際の広い新聞記者の澤村ならば心を許すべき者ではなかったことを考慮に入れても、魯迅よりすれば、ここには余りにも正しすぎる鬱陶しさというものもあるのではないかと思う。

＊私たちは、その以前から小さな留日学生倶楽部の観があった北四川路行きづめの内山書店で、三日をあげずに顔を合せ、顔を合すれば時間を忘れて雑談する例だった。[22]

このように澤村幸夫が書いていればいるほど、何か浮いて離れて行くものがあるような気がしてならない。勿論、魯迅は澤村が知に走るから好きでないとか、そんな単純なことを書きはしない。日記に「春秋の筆法」を施している魯迅日記は、つまり公開されることを常に意識して書いていた魯迅日記は、「未見」と書いたり、貰った書名を書いただけの付き合いとして、澤村幸夫との関係を表現したのである。つまり、政治的状況などを考慮に入れても、二人の書き残したものから判断して、私は、澤村幸夫は魯迅とうまが合っていなかったような気がする。

確かに澤村は、澤村の言うように毎日のように魯迅と会い、話をしたかも知れない。だが、それは決して心を通わすような話、付き合いではなかったと言えよう。

では、漫談会の主催者とも言える内山完造の方はどうであったろうか。

内山もこれまたどうしたことか、澤村幸夫のことに一言も触れていない。内山の『魯迅の思い出』（実は、魯迅友の会編集）や『花甲録』など五、六冊を見たにすぎないのであるが。内山自身の紹介による「漫談会」のメンバーにも、塚本助太郎と内山嘉吉の対談にも、澤村幸夫の名前は出て来ない。[23]

四

私は、内山こそ「支那通」だと思うが、内山ほど「支那通」を嫌った者もいないと思う。[24] それは、外国の風俗習慣などを熟知するには、その国に広く長く住まねばならず、出来ることなら、限りなくその国の人間になりきることが望ましいからだ。にもかかわらず、こと中国となると、せいぜい四季のワンサイクルを過ごした程度で、或いはまた一地方に足を踏み入れただけで、中国人の思考方法を小賢しく断定する者が多い。「支那通」と言われる人々の、一知半解の浅薄な理解を内山は嫌ったのである。でも、澤村幸夫は、そういう出来合いの「支那通」ではなかった筈だ。

そもそも「支那通」とは、どういうものか。「支那通」とは、支那のことに通じている者のことに違いない。その支那のこととは、政治経済文学などといった分野ではなく、生活風俗習慣といった分野であるようだ。中国人の生活ぶりを知っているだけでなく、生活の知恵に通じていること、即ち中国人の思考（＝論理）を理解している人のことであろう。中国人の思考を理解し、それを優れた生活の知恵として紹介に努めた者が内山完造だ。

それならば、内山と澤村との違いはどこにあるのだろうか。

内山が紹介する中国人の思考に、例えば、魯迅が原稿料百元を手にした時、ちょっとした知り合いの女が夫の保釈金を無心した。魯迅は話を聞くと、その女が騙されていると思いながらも、すぐ百元を渡した。婦人はただ一言「謝々」と言っただけで、金を手に帰って行った、という話がある。

その時の様子を少し引用しよう。

＊私は余りにも馬鹿々々しいので、私が先生の立場であったらお金は出しませんネ。そしてその騙まされて居ることを充分説明して中止させますネ、と云うたところ先生は、／立場を代えて、老板が、彼の婦人の立場に立って、私が老板のように云うて中止させたとしたら、老板は止むを得ず承諾はするでしょうが、心の中ではきっと私を恨みに思いましょうネ。／と云われて、私は大いに赤面した。先生は更らに、／支那の習慣では、それは出来ないのです。こう云う時には、有ったら断ることは出来ないのです。どうしてもやるのが習慣です。／と云われた。／私はその有ったら断ることが出来ない、やるのが習慣だと云うことについて、それは貴方の面子ですかと聞いたところ、先生は、／いやいや面子とか顔とかではありません。条件は何んもありません。無くて困って居る者に有る者がやるのは当然ではありませんか。アッハッハッハ。／と云うて笑われたが、私はいよいよ赤面せざるを得なかった。／無くて困って居る者の頼みが有ったらやるのが当然ではないか。／何んと云う徹底した言葉であろうか。しかしこの言葉が説明と文句を抜きにして実行されて居るのである。それがただ一つの習慣として行われて居ると云うのである。考えるなと云われても私は考えずには居られない。この一事をもってしても、徒らに浅薄な支那通を振り廻すことは、断じて出来ないことだと思う。（傍線は原文のまま）[25]

引用が長くなったが、この習慣と発想は、確かに日本人にはわからないことである。だが、引用文の傍線部分は決してわからない論理ではない。むしろ単刀直入の単純で徹底的な論理である。だからこそ日本人は実行できないのであろう。実行できないから、そのように実行して生活している人々の論理を見過ごしてしまうのであろう。ここには、個々の現象の差異などではなく、生活観、人生観として染みついている中国人の習慣と発想が捉えられているのである。なるほど、論理を社会状況とすり合わせ、ねじ曲げる日本人の「浅薄な支那通」では歯が立たない。限りなく中国人に近づいて生活していないからである。

つまり、内山は中国人として生活しようとし、中国人の生活論理に入ろうとしている者である。それに対して、澤村は中国人の生活論理を熟知しながらも、あくまでも、それを対象物とするに止まった者と言っていいだろう。先に見たように、「龍蝨」を内山は食べ、澤村は摘んではみたものの、その何たるかを知って食べなかったところに、それは象徴的に現れていたと言える。そして、澤村が「けだし、皮肉屋で、物識りの先生も、かすてら、せんべいに手を出すやうに手を出しかねたのである」と付け加えた、その「けだし」と書いた姿勢に、魯迅は何か合わないものを感じたのかも知れない。

＊これも自分の発見でなく内山書店で漫談を聞いて居たときに拾ったものだが日本人程結論を好む民族、即ち議論を聞かうが本を読まうが、若し遂に結論を得なかったらどうしても気がすまない民族は、今の世の中に頗る少ないらしいと云ふことである。(26)

これは、魯迅が内山の『生ける支那の姿』に書いた「序」の出だしの文である。長くなるので全文を引用しない

が、私はこの「日本人」のなかに、「支那通」の澤村幸夫の影を見てしまうのである。

おわりに

澤村幸夫は、次のような反省とも言える文章を書いている。

＊さういふ私も、多分、魯迅を悦ばさなからうと思ふことがある。それは昭和十年十二月のことだった。私の『支那草木蟲魚記』の続集の中に「落花生」といふ題で、私はユーモア作家の称のある老舎の一文を翻訳して挿んでおいた。その中で、ほんの少し彼に触れた。／左翼の老作家で、老舎よりは先輩に当る魯迅は「嫌な訪問客には、りんかけの南京豆を出すに限る。私はいつもさうすることにきめてゐる。」と、私に語ったことがある。彼のことであるから、何か知ら南京豆に風刺を寓してゐるとしても、彼が南京豆そのものに敬意を有してゐないことは明かだ。この点からすれば、同じ左翼傾向を有し同じ無産の作家であるとしても、老舎の方が甚だしい傾向を帯びてゐると、事の南京豆に関する限りにおいては、私は考へる。／これが魯迅の眼に入ることがあらうとは、もとより予期してゐなかったのに、どうしたことか、場所もあらうに、人もあらうに、内山書店の店先において、彼の外に、そのころは自然科学研究所にゐた魚の博士の木村重君、主人完造君など一味集合の席で彼の眼に入ったのである。りんかけの南京豆がさほど問題となるはずはない。が、老舎と彼とを対比したやうな私の書き方が、多分、甲論乙駁の盛んなる一場面を描き出したのであらうと察する。ただ、その内報を伝へた木村君が、彼の私に対する言だけを、巧みに省略してゐたので、肝腎な点はぼかれてしまっ

てはゐたが、私はそれだけ恐縮したことである。[27]

私は今、魯迅と老舎との関係から、つまり当時の状況から細かく検討することはしない。それを行なうに足る資料を、私は持ち合わせていない。

もとの『支那草木蟲魚記』続集の「落花生」と、ここに澤村自身に引用された「落花生」の文章とは、少しの語句の違いがあるが、殆ど同じである。老舎の一文は、西瓜子と南京豆とを比べて、前者をブルジョアみたいなものとし、後者を詩的インスピレイションを持つ安上がりの物としている。老舎の方が「甚だしい傾向」を帯びているかも知れないが、これは単純で浅薄な対比にすぎないように、私には思える。「軽いユウモア」のある文というよりも、私にはやや気障な文に思えた。

だが、もとの「落花生」には、澤村が引用した部分のまだ倍以上の文が書かれていて、最後の段落では、「例の皮肉屋の魯迅」は「国罵」という言葉を作ったが、南京豆は「国食」と言えるなどと述べた後、次のように結ぶ。

＊かの国父孫逸仙が、民国二年、わが国に晴れがましく革命成功者として来遊し、朝野の歓迎攻めにあってゐた時、私は彼を送迎するために何度か汽車旅行をともにしたが、彼が戴天仇、馬君武、宋嘉樹、宮崎滔天などと、時折りの暇つぶしに、指でほぐしてはぽりぽりと食ってゐたのは、何と、りんかけの南京豆だった。老舎よ、魯迅よ、一党治国の国父が食ったものだ。詩どころか、革命のインスピレイションさへ、この豆はもってゐるんだ。[28]

澤村のこの最後の呼びかけの一文など、私にはユウモアというよりは、なんとなく偉そうな雰囲気を感じる。澤村はものをよく知っている。そして、「大官巨儒」[29]とも付き合いがある。そういう者がいつの間にか持ってしまう雰囲気――自分も彼等と同じように偉いと思ってしまう――が、澤村にはあったのではなかろうか。こんなところにも、澤村幸夫と魯迅とが合わなかった理由があるかも知れない。

私自身の考えでは、澤村幸夫は生真面目で、知的好奇心に富んだ熱心な男に思える。自分でも「私といふ人間の無知と迂闊とが」[30]と言う謙虚さが、無かったわけではない。

＊一たび彼と親しく語り、もしくは彼の作物を通じて彼の人物を見た日本人が、いづれも魯迅の存在を認めたのは人間の精神と精神とが、何かの一点で触れ合ひ、抱き合ふものであることを彼において発見した結果でもあったらう。[31]

このような言葉を読むと、澤村幸夫もそれ相当の人物であったに違いないと思う。

にもかかわらず、何かいま一つ欠けているものを、私は感じてしまうのである。

因みに、澤村幸夫は、魯迅を「千葉医専」で学んだ者としていた。そして、この間違いには最後まで気づかなかったのである。

注

（1）毎日新聞社の人事課田中豊稲氏及び調査審議室吉野氏など諸氏にお世話になった。記して感謝の意とさせて頂く。

（2）詳細については調査がまだ行き届いていない。澤村幸夫の履歴面については『関西大学　中国文学会紀要』第十五号（平成六年三月）に書いた。

（3）新聞記者本来の記事については調べようがなかった。また、論説について私が探し得た澤村幸夫が書いた社説は、昭和三年九月一日の「寝陵発掘の暴行」のみであった。これは、澤村自身が「張作霖開弔・皇陵発掘案」（『支那』第二六巻満洲国特輯号（昭和一〇年十月）で明らかにしている。

なお、東亜調査会は昭和四年元旦紙上に会の趣旨を発表し、澤村が上海に向けて出発した直後の六月二七日に東京会館で披露宴を開いている。『大阪毎日新聞五十年』（大阪毎日新聞社編、非売品、昭和七年三月、大阪毎日新聞社三三三-三三五頁）によれば、澤村は理事になっている。

（4）澤村幸夫「三十年を一世とする」〔対支三十年を語る〕（『支那』第三〇巻一月号、昭和一四年一月）。

当時の雰囲気を知るために、〔対支三十年を語る〕の標題と、筆者およびその肩書きとを列挙しておこう。

1　回顧三十年　　内閣参議・陸軍大将　松井石根
2　対支時務の片鱗　　本会理事　白岩龍平
3　三十年前の人々を繞りて　　三菱社参与　秋山昱禧
4　対支三十年の回顧　　陸軍少将　佐藤安之助
5　対支三十年を語る　　前同文書院教授　青木　喬
6　三十年断片記　　前海外企業書記長　井坂秀雄
7　大陸の先覚者たち　　読売東亜部長　村田孜郎
8　刻下の急務　　本会評議員　田鍋安之助
9　三十年を一世とする　　大毎東亜部顧問　澤村幸夫
10　支那人の思出で　　陸軍中将　松井七夫

（5）拙稿「氷心の日本への紹介―その二―プリミティブの強さ」（『関西大学　中国文学会紀要』第十四号、平成五年三月）を参照さ

れたい。

(6) 澤村幸夫「周建人・宋子文」(『東洋』第三三巻第十一号、昭和五年十一月)。

(7) 澤村幸夫『上海人物印象記(第二集)』東亜研究会、昭和六年九月。なお、付録「澤村幸夫著書目録一覧」も参照されたい。

(8) 『魯迅全集』第十五巻、北京人民文学出版社、一九八一年、四九〇頁。

(9) 『魯迅全集』第十九巻、学習研究社、昭和六一年八月、四六三頁。

(10) 澤村幸夫「魯迅君のしのび草」(『同仁』第一〇巻第十二号、昭和一一年十二月)。本文の方の標題は「魯迅君しのび言」となっている。

(11) 澤村幸夫「魯迅を懐ふ」(『満蒙』二三年一月号、昭和一七年一月)。

(12) 澤村幸夫・植田捷雄共編『支那人士録』(大阪毎日新聞社　昭和四年四月)三一―三二頁。この資料については、南山大学の中裕史講師のお世話になった。記して感謝の意とさせて頂く。

(13) 同注(11)。

(14) 澤村幸夫「一〇、蟑螂・禾蟲」(『支那草木蟲魚記』東亜研究会、昭和九年十月、(東亜研究講座第五九輯))三四頁。なお、この本及び続集注(28)の二冊を、坂出祥伸・関西大学名誉教授より拝借した。記して感謝の意とさせて頂く。

(15) 『魯迅全集』第十九巻、学習研究社、昭和六一年八月、三〇八頁によれば、次のようである。

＊Japan Today and Tomorrow　英語、『日本の今日そして明日』。日本のグラビア雑誌。荒木一郎編。大阪毎日新聞社発行。

(16) 同注(6)。

(17) 『魯迅全集』第十八巻、学習研究社、昭和六〇年十一月、口絵写真四頁には、十八名のうち十四名の名前が記されている。

(18) 澤村幸夫自身も、引用文より前の文章でそういうことを書いているし、塚本助太郎も「魯迅と田漢とは派が違っていたんです」(内山完造『魯迅の思い出』社会思想社、一九七九年九月、三七一頁)と言うように、当時から魯迅と創造社や太陽社の良くない関係は日本人にもかなり知られていた。

(19) 同注(11)。

(20) 澤村幸夫「苕溪の逆魚」(『江浙風物誌』東亜研究会、昭和一四年二月) 一三頁。
(21) 同注(11)。
(22) 同注(10)。
(23) 内山完造『花甲録』岩波書店、昭和三五年九月。及び、内山完造著、内山嘉吉・籬、魯迅友の会編『魯迅の思い出』社会思想社、一九七九年九月。
ついでながら、偶然とはいえ、口絵二頁の写真説明から澤村幸夫の名前が落ちている。
(24) 内山完造『花甲録』岩波書店、昭和三五年九月。一八五頁・一八七頁などに散見する。また、『魯迅の思い出』五五頁でも、次のように言う。
＊従来支那の事と云えば、満州の一角を見た人が、スグ支那はと云い支那人はと云うのであるが、そうして内地の人々は下らぬ不正確な所謂土産話を聞かされて来たのである。それは今日の真面目な支那を考える人を、どの位禍いして居ることであろうか。
(25) 内山完造「当然のことだ」(『魯迅の思い出』社会思想社 一九七九年九月) 七四—七五頁。
(26) 魯迅「序」(内山完造著『鄔其山漫文 生ける支那の姿』学芸書院、(昭和一〇年十一月初版) 昭和一一年六月第三版、序一頁)。
(27) 同往(11)。
(28) 澤村幸夫「四、落花生」(『支那草木蟲魚記——続集』東亜研究会、昭和一〇年十二月、(東亜研究講座第六十六輯)) 二〇頁。
(29) 竹越與三郎「江浙風物誌に題す」(澤村幸夫『江浙風物誌』東亜研究会、昭和一四年二月、所収 一頁。竹越は次のように書いている。
＊澤村君は当時猶ほ未だ一少年であったが、其才幹気魄によって黎元洪・梁鼎芬・辜鴻銘・楊守敬・王闓運等の大官巨儒の敬愛を受けたので、君に先だつ十数年、支那に在りし人々に対して閉ぢられた門戸は、君に対して開かれた。
(30) 澤村幸夫「二 薏苡——ずずだま」(『支那草木蟲魚記—五続集』東亜研究会、昭和一一年十二月、(東亜研究講座第九十六輯)) 八頁。
なお、謙虚な言葉は何もここだけでなく、あちこちに散見する。

(31)　澤村幸夫「在りし日の魯迅」(『支那』第二七巻第十二号、昭和一一年十二月)。

付録：澤村幸夫著書目録一覧

澤村幸夫の著書及び共編著のみを、発行順に挙げた。なお、15の編著は、この本一冊分が澤村の著である。

＊印は、飯田吉郎編『現代中国研究文献目録　増補版』(汲古書院、一九九一年二月)に採られているものである。

?印は、未確認なものである。

この表は、「澤村幸夫著作目録」の一部である。作成に当たり、多くの方々のお世話になった。いちいちお名前を挙げないが、心よりお礼申し上げる。

1 ?一九二八、?　『支那農民の生活』東京　東亜研究会　『東亜研究講座』十八輯
2　一九二九、四。　植田捷雄と共編『支那人士録』大阪毎日新聞社
3 ?一九二九、?　『支那漫談』東亜研究会　『東亜研究講座』?輯
4 ＊一九三〇、七。　『上海人物印象記(第一集)』東亜研究会
5 ＊一九三一、五。　『上海風土記』上海日報社
6 ＊一九三一、九。　『上海人物印象記(第二集)』東亜研究会
7 ＊一九三二、十。　『支那現代婦人生活』東亜研究会
8 ＊一九三四、十。　『支那草木蟲魚記』東亜研究会　『東亜研究講座』五十九輯
9 ＊一九三五、十二。　『支那草木蟲魚記(続集)』東亜研究会　『東亜研究講座』六十六輯
10 ?　『支那草木蟲魚記(続続集)』東亜研究会　『東亜研究講座』?輯
11　一九三八、四。　『支那草木蟲魚記、支那草木蟲魚記続集、支那草木蟲魚記続続集』(三集合訂本)東亜研究会

12　一九三九、二。　『江浙風物誌』東亜研究会
13　?一九三九、?　『支那草木蟲魚記（四続集）』東亜研究会　『東亜研究講座』?輯
14　一九四〇、十二。　『支那草木蟲魚記（五続集）』東亜研究会　『東亜研究講座』九十六輯
15　一九四一、十。　編著『現代実用　支那語講座　XI　年中行事編』東京文求堂
16　一九四一、十。　『支那草木蟲魚記』（五集合訂本）東亜研究会
17　一九四一、十二。　『支那民間の神々』東京象山閣
18　?一九五四、?　『上海紳士録』毎日新聞社